

「消費される農村」とムラの主体性

鶴 理恵子

The Study about the Consumed Rurality and Subjectivity of Mura

Rieko TSURU

要 旨：本論の目的は、現代社会において農村が「消費される存在」であることは不可避として、それに対するどのような対応があり得るかについて、ムラの主体性という観点から考察することにある。農村の人々が持続的で安定した生活および農村社会の維持・再生をはかる方法の1つとして都市との交流を行う際、いかに「消費されるだけの存在」で終わることなく、新たな社会関係構築等を掴み取ることができるか。ムラの主体性とは何であるか、ムラが自立的であり得る条件にはどのようなものがあるかを明らかにすることを通して、ムラや地域の維持・再生のあり方を考えたい。

立川雅司（2005）はポスト生産主義下の社会における新たな農村研究の方法論を提示した。立川の主張は明快で、農村を消費する側の論理はたいへんクリアに整理され、提示された。本稿はそれをふまえた上で、農村側の受け止め方や捉え返しは、どうなっているのかを明らかにする。依拠する資料は、2000年頃から行ってきた、鳥取・島根・岡山県の中山間地でのフィールドワークに基づく。

都市－農村交流を通して、外部からムラへさまざまなものがもたらされる。ムラの主体性とは、外部からの刺激に対して、それまでの経験や知恵の蓄積の中から、どう対応するかをその都度決めていく、その姿勢である。準拠するものが自らの側にあるかどうか、消費されてしまうだけの農村となるか否かの分かれ目となっている。

農村が消費されるあらゆる状況において、何かが残るような深さと継続性を持った交流を行うように努めること、また現代社会を広く覆うある強迫的な空気との距離を取ることの重要性を指摘した。

キーワード：消費される農村、ムラの主体性、田舎のプロデューサー、都市－農村交流、状況の自己定義

1. はじめに

(1) 本論の目的

本論の目的は、現代社会において農村が「消費される存在」であることは不可避として、それに対するどのような対応があり得るかについて、ムラの主体性という観点から考察することにある。農村の人々が持続的で安定した生活および農村社会の維持・再生をはかる方法の1つとして都市との交流を行う際、いかに「消費されるだけの存在」で終わることなく、新たな社会関係構築等を掴み取ることができるか。それはムラの主体性と大きく関わっていること、ではムラの主体性とは何であるか、ムラが自立的であり得る条件にはどのようなものがあるかを明らかにすることを通して、ムラや地域の維持・再生のあり方を考えたい。

(2) 先行研究の整理

農村研究において、都市と農村の関係に着目するものが2000年代に入り、増えてくる。特に、2004年開催の第52回日本村落研究学会大会における大会テーマセッション「消費される農村－現代農村研究における方法論的フロンティア」およびそれを基に編集された年報41集は、「消費される農村」をキーワードに、日本における農村研究に新たな視点を提示したという点で、たいへん大きな意味を持った（日本村落研究学会、2005）。

新たな視点とは、農村を消費・受容する農村外部の人々の視点に着目するという視点をさす。テーマセッションの

解題を行い、新たな方法論の提示を行った立川雅司は、従来の日本の村落研究においては、村落に対する外からの影響について、主に資本や国家の論理と関連づける視点はあったが、同じ外部でも上記の視点は見過ごされてきたとする（立川、2005）。実際、農村は、農産物を提供するだけでなく、農村のイメージや文化的シンボルを外部の需要に応じて提供してきた。こうした現実をふまえ農村を消費する側の論理を明らかにすること、そこから農村再生の新たな回路を見出すことを立川は研究の目的とした。

立川の主張は明快で、農村を消費する側の論理はたいへんクリアに整理され、提示された。また、農村空間の商品化を「農村空間のもつ様々な要素（景観、イベント、土地、伝統、社会関係等）が、消費の対象として、時に既存の文脈と切り離されて市場的評価の対象となることを指す」ことと定義し、とくに「消費的まなざし」のもとで農村空間はその隅々にまで商品化の作用が浸透するようになると考えられること、「政策的まなざし」においても商品化された評価をもって政策の正当性を確保しようとする動きもあると述べている。

そして、そうした中、農村空間の商品化は都市と農村の区別が相対化され、同質化していくのではなく、むしろ農村はその農村らしさを再構築・再提示し、農村らしさを強調する傾向が生じてくるのではないかとする。

農村外部のまなざしにより記号として消費される農村という研究の視点は、欧米の農村研究では主流となりつつあるものであったが、まだ日本ではあまり知られておらず、また、従来の方法論との接合が不十分であったこと等で、大会テーマセッションにおける議論の深化には課題を残した⁽¹⁾。

秋津元輝は、年報第41集のもととなるテーマセッションに準備段階から関与してきたこと、その動機を「日本とよく似た状況におかれている先進国農村を対象にして、欧米ではどのような方法で農村研究が行われているのか。その追及が、日本の農村研究を国際標準に合わせるためにも、今の段階で是非とも必要と感じたから」とする（秋津、2005b）。さらに、「これをもって紹介終了とするのではなく、この試みが現代の農村問題へのアプローチを多角化する手段として、精力的に継続されること」をテーマセッションの企画および本年報の編集を担当した者として期待すると述べている（秋津、2005b）。

2006年開催の第54回大会では、大会テーマセッションとして「日本農村におけるグリーンツーリズムの展開」が行われ、それをもとに『年報 村落社会研究 第43集 グリーン・ツーリズムの新展開—農村再生戦略としての都市・農村交流の課題』が編まれた。大会で座長を務め、年報第43集では全体の趣旨および各論の位置づけを書いた荒樋豊は、2年前の立川らの大会テーマセッションや年報41集については一定の評価をする一方で、自らは別の考えを取っている（荒樋、2008）。

ただ、セッションでの報告者であり、年報第43集の執筆者の1人でもある徳野貞雄は、棚田オーナー制を行う集落の事例の中に「消費される農業・農村」そのものの状況があると指摘している。そうした状況を生み出す原因として、政策の内容と求めるものとのズレ、「有効な内発的な地域振興政策がないまま、〈夢に漂う都市農村交流〉に希望を託したこと」、都市農村交流単体ではなくそれを行う地域社会の内部構造と合わせて検討する方法の欠如等をあげている（徳野、2008）。

その後は農村社会学においては牧野修也（2008）、秋津元輝（2009b）の論考を除けば、「消費される農村」を扱った研究はあまりなされていないのが現状である。地理学においては、高橋誠（1998、1999、2002、2013）を嚆矢に、池田和子（2012）田林明（2008、2011、2013）、菊池俊夫（2013）等の研究があげられる。

(3) 本論の問いと研究方法

本論では、上記のような先行研究をふまえたうえで、1つの問いを立てたい。「消費される農村」側の受け止め方や捉え返しは、どうなっているのだろうか、ということである。消費的まなざし、政策的まなざし等、まなざされる対象としての農村側は、それらの「まなざし」をどう受け止めているのか。その際、ムラの側には、受け止め、あるいは捉え返すどのような主体があるのか。その主体はどのようなしくみで形成され、どのような選択や将来展望を持っているのか。

依拠する資料類は、私が2000年頃から行ってきた、鳥取・島根・岡山県の中山間地でのフィールドワークに基づくものである。農家女性の起業活動とエンパワーメント、農村ビジネスと地域（旧村単位）再生の仕組み、棚田オーナー

制度による農業・農村の変化などをテーマに行ってきた。それぞれのムラの取り組み内容は、直売所、農産加工製造販売、宿泊施設の運営、農業・農村体験や有機農業、グリーンツーリズムを意識したイベント等多種多様であるが、それらを都市－農村交流として捉えておく。

なお、本論では「消費される農村」の定義を、立川の整理した「ポスト生産主義下における農村の特徴（仮説）」（立川、2005、p9の表1）を参考にしつつ、「農業生産の場としてよりも、何らかの好ましい価値の表象として捉えられ、農産物の購入、癒しや余暇、農業体験や交流体験等を求められる客体としての農村」としておく。

「まなざし」について、立川は「「まなざし（gaze）」という用語は、M. フーコーの『臨床医学の誕生』（1969）に由来し、これをJ. アーリが観光に適用したもので、「アーリは「観光へのまなざし」を、非日常的な経験に対する大衆的な性格をもつものと特徴づけ、こうした非日常的なものが記号化され、主として視覚を通じて対象化、再生産されていく傾向をもつもの」ととらえたとする（立川、前掲書、19-20）。本論でもこれを前提とするが、E. サイドが「オリエンタリズム」を「東洋についての知」から、「東洋についての西洋のまなざし」へと転換させたこと、フェミニズムにおいて女性が常に男性から「まなざされる身体」であったと指摘したこと等にもみる、権力の非対称性への敏感さを強く意識していることを付け加えておく。

2. 都市－農村交流と農村側の捉え返し

(1) 住民たちが形成していく教訓やモットー

日本において都市－農村交流が盛んになっていくのは90年代半ば以降である。これは、グリーンツーリズムの政策的後押しが90年代以降始まっていくことと深く関連している。ただ、それ以前の80～90年代から試行錯誤しながら、独自に取り組んできた「先進事例」もある。そうした地域では、いろいろな成功や失敗を通して、様々なことが教訓あるいはモットーとして蓄積されてきている。

たとえば、「イベント疲れ、せんようにしよう」、「無理はすまあ」、「お客さん扱いせんでもええんじゃ」、「私たちがまずは楽しまないと」、「何のためにしょうるか、見失わんようにせにゃあ」、「1回きりでのうて、少人数でも長く続くことを望んどんじゃ」などである⁽²⁾。住民たちは、交流の本質を見失わないこと、継続したつきあいであることの重要性を強調してきた。

また、住民ひとりひとりの姿勢としても、自分のペースを考えること、良い意味でのマイペースを保つことが取り組みの持続性を支える重要なポイントであることが語られる。そして、リーダーには、何が大事か見失わない見識が求められており、実際、うまくいっているとされる地域にはそのようなリーダーの存在がある。

外部要因として、外部の人や組織の姿勢がどのようなものであるかは、決定的に重要である。自己の利益優先で近づいてくる個人・組織もあれば、「地元の自分たち以上に一生懸命にやってくれた」と評される個人・組織もある。

(2) 「まなざされること」への注意深さ

1) 「状況の自己定義」の重要性

まなざすのは、ムラの外部の人たちであり、その際、まなざされるムラやその住民たちは単なる客体となる。一方的になる時、そこに大きな問題が生じることに對し、住民側がどこまで敏感であるかが重要な分かれ目となる。

非対称な権力関係においては、状況を定義するのは常に強者であり、一方的に定義されるのは弱者の側となる。それは、都市－農村の交流においても当てはまる。実際、そのことに敏感な人が出てきている。彼らは、都市の側から「田舎は都会と違って良い所だ」、「田舎の人は良い人たちばかりだ」と言われること、「田舎は不便だ」、「田舎の人は遅れている」といわれること、そのどちらにも反発を覚えるという⁽³⁾。

そうした外からの定義を拒否すると同時に、自分たちで自らの地域や自分たち自身を定義することの重要性に気づくことで、自分たちが単なる客体ではなく、外界へ働きかけていく主体でもあるという捉え返しがなされることになる。「まなざし」の相対化、捉え返しの結果として起きていることは、自己が主体であることの認識である。

既述の立川の論考においては、農村に対して「まなざし」を向ける主体として、都市ないし消費者と行政の2つを区別し、それぞれが向けるものを「消費的まなざし」と「政策的まなざし」としている。本論でも基本的にはこの区

別を前提とするが、そうした外部のまなごしに対する内面化を行うことに止まらず、ムラの人々自身のまなごしによる捉え返しが重要な意味を持つことに着目する。

2) 誰が、田舎を売り込むか

ムラの人々自身が自らを定義する主体であるという気づきからは、誰が田舎を売り込むか、という問いかけにもこれまでとは違う答えが用意される。それは、自分たち田舎の人自身だ、自分たちだという確信や決意である。同時に、「よそから入ってきてがちゃがちゃ言わせない」、「引っかけ回させない」だけの主体性、自立性が求められる。

岡山県高梁市宇治町と同市備中町平川地区は、共に少子高齢化、過疎化が進行する地域であるが住民主体のまちづくりが活発になされている地域として県内外で知られている⁽⁴⁾。宇治町では旧庄屋筋の家を改装し、食事・宿泊施設として地区全体で運営する等、グリーンツーリズムの優等生のような取り組みをしてきた。それに対する行政および委託された民間等のまなごしに対し、見事に一定の距離を取った対応をし続けている。ある男性は、色々な会議やイベントへの出席、事業の導入等の誘いに対し、「グリーンツーねえ、わしらがやりようること、そう言うてじゃ。名前は何でもええんじゃ、おもしろう感じてやりようだけじゃけえ」として、「何でもかんでもつきおうとっちゃおえん、体がもたんけえな」と話す。

また、高梁市備中町平川地区でも、岡山県の事業（限界集落を対象とした集落機能維持再編事業）導入の際、キーパーソンの1人がにこにこしながら、しかしきっぱりとした口調で「県やT先生（筆者のこと）らあが言うことじゃけえ、ええことしてくれてじゃと思うけど、よう分からんうちははしとうねえ、だーっと流されていってあとであれ？となっちゃあいけんけえ」と言われた。私自身の研究者としての姿勢が試されるような場面であった⁽⁵⁾。

(3) 消費されること／交流すること

1) 「消費」とは何も残らないこと

農山村の人々は、「消費される農村」という言葉を使うわけではない。しかし、人々がどのような場合に不満を感じるのかに注目してみると、「結局、何も残らなかった」という時であることが多い。先に、私は「消費される農村」を「農業生産の場としてよりも、何らかの好ましい価値の表象として捉えられ、農産物の購入、癒しや余暇、農業体験や交流体験等を求められる客体としての農村」と定義したが、何が消費なのかについて、本論では当事者である農村の人々の受け止め方に力点を置きたい。つまり、自分たちが「自主的」「主体的」に取り組んだものであっても、何かが残った、何かを得たと思えるようなものでない場合、「消費された」ということになるのではないか。

それと共に、交流することの大切さも農村側では語られる。人々は、交流をお互いに何か変わることに、相互に影響を与え合うことだという意味で使っている。それは、人格的に開かれた、対等な関係性において成立するもので、「一方的、一回だけじゃ、何も残らん。残るのは、ゴミと疲ればあじゃ」という名言を聞いたこともある⁽⁶⁾。

「消費されること」は、行政との関係においても起こりうる。岡山県では、2008年頃から県独自の事業として中山間地域の活性化事業を始めた。事業導入を決めた地区では、活性化計画策定、地域の活動報告、元気集落への登録、「おかやま元気集落」としての事業などの実施等が目白押しとなる⁽⁷⁾。これらの事業がまさに刺激となって「活性化」した地区は多い。ただ、自分たちの地区のペースをうまくコントロールできない時、「やらされ感」が募ることになる。「(県の事業に)おつきあいはする、知恵や力も借りる。でも、振り回されない」という共通理解がある地区は、うまく活用している。この違いを「ムラの主体性」と呼ぶことにする。

平川地区では、この事業を契機に地元高梁市のK大学以外にも、県南部のいくつかの大学とのつながりが生まれた。例えば、大学生が年末に平川地区住民の個人宅を訪れて年末大掃除を手伝う、その後で、大学生に正月飾りの作り方を教えたり、お昼を作って皆で食べたりした。初の試みだったので、県としてはできるだけ多くの参加者が欲しいと、地元K大学のボランティアセンターが窓口となり、かなり頑張って声かけをした。その結果、20人を越える大学生が参加し、盛會に終わった。しかし、その際も、平川地区の方からは、「もっと人数が少なくてもいいからこれ一回で終わりにしないで、また別の機会を見つけて同じ学生さんに何度も来て欲しい」という声が出された。「1回きりのイベントを何回、何十回やっても、それではほとんど何も残らない」という考えからであったと聞いた。

2) 相互の変容と人格的に開かれた対等な関係

須藤廣が説明するホスピタリティの意味は、消費と交流の異同を考える際の示唆に富む（須藤、2008）。須藤によれば、ホスピタリティには、相互の変容（受け入れる側、受け入れられる側）が伴う。ホスピタリティ、つまり他者を受け入れるということは、その過程で自己が他者によって変容することを意味する。観光客が、観光地の〈他者性〉そのものと、それを受容することによる〈自己変容〉を楽しむように、観光客を受け入れる観光地住民もまた、観光客の〈他者性〉と、それによる〈自己変容〉を楽しむ、という互酬的行為の「理念型」を想定できる。ただし、こうした〈非日常性〉の互酬性が成立するのは、ホストとゲストとの関係が人格的に開かれており、かつ原則的に対等であることが条件だと述べる。

ムラの側には、都市農村交流における対等な関係性はもちろんのこと、都市等からの移住者を受け入れていく際こそ、よりいっそう対等な関係性が大前提という確信を持つムラも出て来た。そのことがかえって移住の成功をもたらしていると思われる事例もある。岡山県高梁市備中町平川地区では、2008年、県・市との協働で、農業・農村振興策の観点から新規就農および移住者を呼び込む事業を始めた。「平川村定住促進協議会」という組織を立ち上げ、関西地区の人々を対象にIターン者を募集してきた。専業農家から農的暮らしまで移住希望者はどのような考えを持っているのか、一緒にじっくりと整理しながら、平川地区のトマト農家やピオーネ農家で農業体験や祭礼等の年中行事体験を通して、お互いに知り合っていく。お互いに気にいれば定住へ向けて準備しましょう、というものである。

会長を務めるトマト専業農家の男性は、「お互い、という所がポイント。決して、都会から来る人の気持ち次第、という一方的なものではない。お見合いと一緒にじゃ、お互いに気にいらんといいいことにはならんけえ。実際、せっかくですけど、と言ってこちらから断った方もある」と話してくれた。移住して数年経つある男性は、「お客様扱いではなく、親身になって相談に乗ってくれた。誰でもいいからというのではなく、僕らも本気かどうか見られていることで、ちゃんと考えようと思えた。お互いにきちんと色々話をしようとする雰囲気があったことがよかった。最初から信頼できると感じた。どっちかが上からという態度だと、たぶんだめだと思う」といっていた。

(4) ムラの側の意思決定

ムラの側の意思決定のあり方にも変化が生じてきた。ムラ内の色々な人の声を聞く、反映させるように努めるムラも増えてきた。また、「開かれた田舎」として人・モノ・情報など、外部と積極的につながろうとするムラも増えた。その際、無防備に何でも受け入れたり、あるいは外部へ垂れ流したりなど、人・モノ・情報の行き来に何の規制もないかというところというわけでもない。ある「フィルター」のようなものを通して見えるように見える。つまり、どこまで内外両方に向かって開くかを慎重に判断するムラの意志のようなものが働いている地区もあるということだ。意思決定のプロセスや基準が不明瞭な場合、ムラは迷走することになる。先に触れた岡山県の事業導入をはかった諸地区において、迷走する例がなかったわけではない。

ただ、それも1つの苦い教訓として、立ち止まったり、再考したりする機会に換えていく場合もある。ムラの側の1つの結論として、自分たちで結局は考えるしかない、地道に意見を出し合い、皆で合意形成していくこと、それが、一番大事なのだろうと分かったという声も聞いた。県の事業に真面目に取り組みつつ、試行錯誤を重ねる。それを通して学んだことは大きな財産だと受け止められている。

3. 都市—農村交流がもたらしたもの

(1) 農村自身による記号の生産

1) 農村アイデンティティの構築と提示

1960年代以降、各地の農山村で過疎化が進む中、その対応として村おこしや町おこし、あるいはまちづくり等として様々な動きが生まれた。行政主導のものから住民独自のものまで様々ではあっても、そこに1つの特徴を見出すことができる。それは、農村にいったん貼られたネガティブなレッテルをスティグマだと受け止め、そうではない自分たちという新たな農村のアイデンティティを模索し、提示していくものである。外部から押し付けられたレッテルをはがし、新たなものを自らに貼る。自分で名づける、状況の定義を自分で行う、ということであった。

それは、農村自身による記号の生産であるが、その中身は必ずしも外部の志向や嗜好にただ従ったものとは限らないし、外部の志向・嗜好を知った上でそれ引き受けるという点においては、農村の側の明確な主体性あるいはささやかな抵抗を見出すことができる。

2) 田舎のプロデューサー

農村アイデンティティの構築と提示を考える際、「田舎をプロデュースする」という言葉はたいへん示唆的である。名付け親は、岡山県高梁市宇治町在住の男性 MO さん（1954年生）である。MO さんは、宇治町で農家の長男に生まれ、当然のこととして家を継ぎ、「地元の優良企業」である市役所職員となり、地域の中で従来からの農村の行事に参加しつつも、新たな活動や楽しみを見つけていった⁽⁸⁾。MO さんによると、田舎をプロデュースするとは「その地域や地域住民たちの持つ魅力を引き出し、様々な場面でそれを提示すること」を指す。わざわざ「田舎の」と付けているのは、「プロデュースと言えば、東京や大阪やこ（など）、都会でおしゃれに何かやるイメージじゃろ。ここじゃあそねえなことはできん。けど、ここにはこの良さがある、都会とは違うな、わし、それを知ってもらいてえんじゃ。カッコえかろう、わしは田舎のプロデューサーじゃ」。初めて聞いた時、頭を殴られたような衝撃を受けた。

実際、MO さんは宇治町内の元仲田邸（宇治町コミュニティ協議会の女性たちが管理運営する食事・宿泊施設）の土間を自分でコッコツと改装（リノベーション）して、100人ほどは入れる小ホールにし、映画の上映会やコンサート、演劇等を企画運営してきた。宇治町内の住民や地区内外の友人・知人からさらに「友だちの輪」を広げている。それにより、住民の間に地域アイデンティティが生まれ、共有され、それをベースに農村の持続・再生が指向されていくという流れが確かに生まれている。

3) 高梁市備中町平川地区

平川地区には宇治町の MO さんほど突出した人はいないが、50代半ばの男女数名がドラマトゥルギーの視点を持ち、地域内の行事においてさまざまな仕掛けをしている⁽⁹⁾。彼らは、「プロデューサー、脚本家、役者、美術・舞台製作」などの言葉を使って、「行事を作り上げている」、「演出している」と語る。実際、寸劇などがすぐに考え出され、それに人々が協力するという基本的なやり方は既に確立。様々な行事の度に、1つ1つのドラマを自分たちで作り出し、「みんなが主役で平川元気」という平川地区所蔵の横断幕に書かれている通りで、まさしく一人ひとりが主役になれる地域である、という認識を住民の多くは共有している。

4) 好循環のスパイラル

高梁市内のこの二つの地域に共通するのは何だろうか。地域アイデンティティが創出され、それが地域で共有されていること、そしてその地域アイデンティティに支えられた様々な活動が特定の個人やその地域の魅力として地域内外で知られていく。「〇〇さんのファン」、「〇〇地域のファン」を作り出し、地域外の人々を惹きつける。地域外からもその個人や地域が主催するイベントや行事などへ参加、手伝いに。自然と多くの人が寄ってくる。外部から人がやってきて、「〇〇は、いい所だ」と言う。それを見聞きした地域内の住民はその地域アイデンティティを再確認・維持・強化していくという好循環のスパイラルである。同じ地点に止まっているわけではないので、ループではなくスパイラル（らせん階段）の方がぴったりくる。

では、この好循環のスパイラルはどのようにして生まれ、存続しているのか。そこで重要な役割を果たしているものの1つが、田舎のプロデューサーたちである。こうした住民たちのアイデンティティ形成や外からのまなざしを意識しつつ、田舎のプロデューサーたちは、様々な場面で外部からの消費（都市、行政など）に翻弄されない確かさで、田舎をプロデュースし続けている。この役割は、農村のリーダーと並んで、まさに「消費される農村」の時代においては極めて重要な役割と言えるだろう。

(2) 農業者としての誇りや満足感

1) イベント屋じゃない

1990年代、岡山県旧賀陽町（現 吉備中央町）で、合鴨農法で米作りをするグループのリーダー SN さん（当時、40代男性）から聞いた話はとても印象に残っている⁽¹⁰⁾。

SN さんは、農家のアトトリとして生まれ、岡山市高松の高松農業高校畜産科を卒業後、農協勤務のかたわら家の農業を続けて来た。高松農業高校は地域の農家のリーダー層を輩出してきた名門としてよく知られている。早くから有機農業を推進してきた高松農業協同組合との連携も図られていた。SN さんにとって高松農業高校出身ということは大きな誇りである。

SN さんたち合鴨農法での米作りのグループは、岡山県の有機農業生産集団育成事業を受けており、県の方では有機農産物の認知度を高め、販路開拓や販売促進を目的に、スーパーやデパート等で有機農産物の販売イベントを行っていた⁽¹¹⁾。そうした機会に、SN さんたちも出店することが増えていた頃の話である。「イベントに出ていくのはいいこと。でも、そればあしとっちゃいけん、わしら、イベント屋じゃねえんじゃけ。肝心の生産（米や野菜）がおろそかになってしまうと、何のためにイベント始めたか、分からんようになる。でも、けっこう、ようあるんじゃ、そういう勘違いいうんか、間違いがな。イベントで餅つきしたり、持っていった米や野菜がよく売れると、勘違いする。有機農業が浸透してきたんじゃねえんか、農業が見直されてきとんじゃねえんか、と。少しはあろうが、イベントはイベントじゃ。毎日食うもの、それをお客さんがどれだけ考えて買ってくれちゃうか、そこは厳しく見極めんと。浮かれとっちゃ、足もとすくわれる。」

「イベント出店で浮かれても、結局は何も残らない」と SN さんはグループの他のメンバーに対する苦言と共に、自戒も込めているようにうかがえた。SN さんは行政に対しても一定の距離を取っていた。「担当者は2～3年で変わる、僕らはずっとここに住み続ける。担当者は集団を作れば自分の実績になる、本当に農業のこと、僕らのこと考えて勧めとるか、それは要注意じゃ、当然じゃろ」。

2) ものづくりの原点へ帰る

1990年代に40歳前後で妻の出身地である岡山県高梁市内にIターンし、農業を始めたHさんは、近代農業とは異なる農業のやり方を模索しつつ、また少子高齢化、過疎化の進む地域の再生に、色々と頑張ってきた。岡山県高梁市の農業後継者の会でも活発な活動をしてきた。Hさんの人柄やリーダーシップ、考えていることなどに共感する人は多かった。

しかし、2000年代中頃に、あるNPO団体、財団法人とのつながりができ、農産物の有利な販売は高梁ブランドの確立による全国展開である、といった考えに固まっていった。東京のイベント会場での農産物フェアに出店し、足がかりを掴もうとしたがそれはうまくいかなかった。積極的に薦めていたあるNPO団体、財団法人は補助金目当てで農家や農村に近づいたとしか思えないような対応で、結局その団体との関係は続かなかった。

Hさんは「花火を打ち上げるだけ、何も地域に残らなかった…」とこの時のことを振り返って話していた。Hさんは、改めて、地道な活動への回帰をはかる。それは、ものづくりの原点へ帰るということだった。地紅茶（高梁紅茶）に絞って生産、販売活動を展開し、地産地消を意識して近場の店やスーパー、デパート、イベント等への出店をし、地道な路線の確立・定着、広がりへと向かう。紅茶と緑茶が同じ茶葉から作られていることは意外なほど知られていないことに着目し、地元の高校との連携により地紅茶に合うスイーツの開発、イベント時の協力販売等も行った。2012年には第11回地紅茶サミット in 高梁を行い、その後は空き店舗が目立つ地元商店街を舞台に、高梁地紅茶祭りを毎年秋に開催している。地元高校との連携もより強化され、高梁地紅茶は定着してきたように見える。

Hさんは、高齢化で廃園となっている地区内の茶園を2013年から、「荒廃茶園復活応援隊」と名付けた地区外のボランティアを募り、その力を借りて再生させる事業にも取り組んでいる。

(3) 個々人と仲間、集落の幸せの鼎立

鳥越どんづまりハウスは、鳥取県岩美町鳥越集落の女性たち8名が始めた農村食堂である。中山間地域に位置する

戸数30戸ほどの集落で、山間の水田と畑、炭焼き、山菜やキノコ、タケノコ等の山の恵みをうまく利用した生活を送ってきた。現金収入は男性たちの冬場の出稼ぎ（造り酒屋の杜氏や人夫、山林労働者等）に頼る暮らしであった。冬場の積雪もあり、子どもたちは集落を離れ、少子高齢化過疎化が深化していた。

このまま何もしないで集落が寂れるままにしているよりは、集落皆で力を合わせて山間集落の良さを生かした活性化事業をやろうと町役場と県の強い勧めに背中を押されて、県の活性化事業に取り組むことにした。1990年代半ばにスタートし、山菜定食が人気のメニューで、塩と昆布以外は全部「地の物」で山間集落の魅力をフルに活用したものだ。関西方面も含め、町内外のリピーターがついて、10数年間活発な活動を展開した。

しかし、メンバーの高齢化により、最後の数年は、静かに終了するということを念頭に活動、2012年に入り休業（＝実質は廃業）した。その後、2013年春から地域おこし協力隊員を中心に新たなメンバーを近隣の集落出身者から募り、2014年5月、リニューアルオープンし、営業を再開した。顔ぶれは全く変わったが、「おばちゃんたち（どんづまりを経営してきた女性たちの総称）のやってきたことをできるだけ受け継ぐこと」を大切にしている¹²⁾。

食堂の運営に携わってきた女性たちはお互いを「どんづまりの仲間」と呼び、「たくさんの良い思い出、人生の記念、宝物になった」、「最後は止めるとしてもいい思い出」と本当に満足した様子で話していた。集落をあげて農村食堂の経営に取り組んだことにより、ひとりひとりが自分の人生を豊かにし、集落にも輝かしい時期を作り出したという点において、個人と集落双方の主体となりえたといえよう。

(4) 他者への信頼の醸成

鳥根県吉賀町大井谷集落は、90年代後半から棚田保全に取り組んできた¹³⁾。95年頃、棚田の圃場整備による耕作の維持を目的とした集会所が開かれた。基盤整備のシミュレーションでは、水田面積が激減する一方で莫大な事業費（反当300万円以上）がかかることが分かる。鳥根県からは棚田保全に取り組めば畦畔・水路・農道を中心に基盤整備ができるという、棚田保全と地域づくりをセットにしたアイデアが提案された。集落の側では、不便な棚田を平坦な田へと大改造するプランであったため、これは全くの方針転換でたいへんな驚きをもって受け止められた。集落で話し合った結果、棚田保全の決断をし、保全を可能にするために棚田オーナー制度を設け、取り組みを始め、現在に至る。

大井谷集落では、都市農村交流により様々な変化が起きた。棚田へのまなざしの変化、集落のにぎわいや活気、農業・農村や農的暮らしへの肯定的価値づけ、自分自身や農業・農村に対する自信を取り戻すこと、農村女性起業グループの誕生である。

上記のような変化の中、「(集落の) 雰囲気次第に変わってきたように思う」という声を何人もの人たちから聞いた。以前は、「ここはまとまりが悪いというので有名だった」、「自分勝手な人が多かった」、「正直者が馬鹿をみるようなことがあった」、「協力体制がなくバラバラだった」けれど、次第に良くなってきたこと、特に、イベント時の女性たちのまかないの様子やその延長上に生まれた農村女性起業グループ活動の様子が、みんなで仲良く協力し合うことの楽しさや良さを見せてくれたと話す人が多かった。次第に「お互い助け合う雰囲気が出て来た」、「○○さんたちは信用できる」、「◇◇さんたちとなら何とかやれるような気がする」といった他者への信頼が生まれつつある。

(5) ムラの個性の創造

1) ムラの個性

ムラや地域は、外部からの刺激に対して常に何らかの対応をしている。ある問題への対応に関して人々の意見を取りまとめたり、形成された合意に基づいて皆を動かしたりすることもある。今すぐには答えが出ない、出さない方がいいような場合は、結論を急がずに問題を先送りしたり、あえて曖昧なままにしておいたりすることもある。

そうした対応は、ムラや地域によっておおよそある傾向を持つことが多い。すると、それが次第に、ムラの個性（＝特徴的な行動様式）として自他共に認識されていく。それが地域アイデンティティあるいは「らしさ」と呼ばれることも多い。

先述の鳥根県吉賀町大井谷集落のように、利己的な人々・ムラが利他的な人々の行為の蓄積で次第に利他的に変

わっていった事例からは、ムラの個性はまさに人々の行為の蓄積によるものであることが分かる。個人もムラも変わりうる。とはいえ、実際には、大井谷集落はまだ課題を抱えている。棚田保全の中心メンバーからは、今後の棚田保全方法について現行のオーナー制度に加え、集落営農か農事組合法人の道を考えようという提案がなされた。しかし、一部の人に負担が集中する現状では新たな仕組みへ踏み出すことができず、動きは止まったままである。

自分勝手な人たちに振り回されてきた苦い経験を持つ集落の男性は、「そんなにすぐには良くならない」と楽観はしていない。ただ、「外から大井谷を見てもらう、そして意見を述べてもらう。養子、嫁さんたちの声が聞き入れられない地域、それじゃいけないのじゃないかと思っていた。養子も嫁さんたちも地域の人なのに。オーナーさんたちの意見が届いて、理解も進んできたから続いてきたのだと思う」こと、そして「女性のパワーには感心した。特に、田んぼがない方が頑張ってくれとる。大井谷がよくなっても直接自分の家の収入には関係ないのに、すごいと思う、そういう考えの人がもっと増えてくることが大井谷には必要」として、一人ひとりの意見が地域運営に反映されること、みんなのために動ける住民が増えていくことの中に展望があると期待は寄せている。

2) 変化の実例

岡山県高梁市備中町平川地区では、住民主体のまちづくりが30年以上にわたり継続してきた。その過程で蓄積されてきたさまざまなノウハウが「平川らしさ」として伝統のように継承されている。ただ、その伝統は不変ではなく、常に創造的である。少子高齢化が深化する中、平川を取り巻く諸条件は変化し、抱える課題も変化しているが、平川がそうした変化に柔軟に対応できているのも、歴史に学びつつ柔軟さを失わない態度によるものであると思われる。

平川の人々は、平川地区や住民のことを端的に表現することがとても上手い。これは、地域アイデンティティが常に意識されていることの証左といえる。「平川のは、ど拍子」、「平川には、役者、監督、脚本家、何でもそろとうとる」、「みんなが主役で平川元気」、「ええとこじゃ平川、じゃけえ平川…」、「天空の郷 平川」、「まとまりがある、一致団結できる」、「平川一家」等である。

「ど拍子」とは、普通の人はやらないような並外れたお調子者のことで、いい意味とよくない意味と両方で使う。平川の人たちはプラスとマイナス、両方の意味を込めて自分たちのことをそう呼ぶ。「天空の郷」とは、平川地区が標高400m前後の位置にあることをおしゃれに表現したものである。周囲からは平川といえば「山の上の方」、「奥の方」などと言われたり、言ったりしてきた。そこには、「中心部から外れた辺鄙な所」というマイナスイメージがあり、それを払拭する狙いがある。「平川一家」は、平川地区後継者協議会という地区在住の若い人たちの組織が作成・販売している平川特製オリジナルTシャツのロゴである。平川地区の一体感やまとまりのよさ、家族や家族以上に隣近所助け合うといった様々な意味が込められている。外部の人にその意味や由来を聞かれて「ヤのつく組の名前は違うんよ」とにやにやしながら説明するのが、定番となっている。

以上のようなキャッチフレーズ等は、住民に向けては地域アイデンティティの源となり、外部に向けては端的に当該地域のイメージを伝えるという極めて高い効果を持っている。

また、平川地区は障害を持つ子どもたちの施設A学園との30年以上にわたる交流をしている。動機は、「平川の若者の嫁さん探し」で、福祉への理解等とはおよそかけ離れた意表を突いたものであった。そしてその狙いは過去1度も成功していないが、平川の人たちの障害児・者へのまなざしや接し方は、明らかに変わった。ノーマラーゼーション、インクルージョンの具現化である。「色んな子ども、人がおるんじゃないかということが分かる。自分も含めて」とあっさりとして、当たり前のように人々は語る。また、地区内で障害を持つ子どもの親や周囲の人たちも、A学園との交流のおかげで実際に自分の子どもや家族、親せき、周りにそういう子どもが生まれた時、「ひどう（ひどく）慌てずにするんだ」と話していた。

(6) 政策的まなざしの強化と迷走

1) 試行錯誤が続く行政

立川も指摘している通り、行政からのまなざしは、農村の側に様々な影響を及ぼす。仕掛ける側が、答えを用意しないまま見切り発車し走りながら考える状況下では、行政と上手におつきあいできる力量のある農村以外は、さまざま

まな混乱に巻き込まれることになる。事業導入をした集落数が行政の評価に直結する中では、単なる数合わせになりかねないし、仮に善意の塊の担当者でも適切な方向性を住民と共に考える力量がなければ役には立たない¹⁴⁾。

岡山県では2000年代半ば頃から「限界集落」を多く抱える自治体としての危機感が増していく。2007年には中山間地域問題に取り組む知事直属の政策推進室が設置され、08年から「集落機能再編・強化事業」を始めとする政策が始まる。08年と09年の2年間、私は同僚の教員黒宮と二人で高梁市内の2つのモデル地区に関わった。地区内の全集落で個別に住民座談会を行い、住民の声を徹底して拾い上げた。それらをもとに地区の将来を考える策定委員会を立ち上げ、会議を重ね、計画を策定した。今後、全県的に広げることや計画策定後の地区の支援継続を考えると、市・県の担当部署職員のみでは対応しきれないことは火を見るより明らかであった。そのため、県では早い段階からしかるべき団体（NPO等）への委託や協働を構想していた。

岡山県とNPO法人岡山県中山間地域協働支援センター（以下、支援センターと記）はその一例である¹⁵⁾。以下は私がおその事業にたいへん近い所から見聞きしたことに基づく。

支援センターは、平成22年度から5年間の事業を受託し、地域リーダー養成講座、先進事例の講演会やシンポジウム、先進地訪問、県内先進事例の活動報告会等を実施してきた。それらを通して、集落の側に地域リーダーとはどのような存在かの学習や認識、実際に育てていくこと、自らの地域の現状把握と課題や今後の展望などを探ってもらったようなことを投げかけた。また、県内の大学や企業、一般の県民に向かって広く呼びかけ、集落支援サポーターの養成、ボランティア等支援を求める集落とのマッチングを行い、新たに大学・企業・県民と集落とのつながりを作る契機や場を提供した。

成果と共にさまざまな課題が関係者の中で認識されるようになった。交流や支援のあり方、継続性ということ、行政頼み・ボランティア頼みになる危険性、そもそも各集落の目標や展望はどのように設定すべきか、無駄な努力をしないことと諦めに陥らないことの見極め等である。最も基本に置くべきは、住民主体の計画であり実践であることだったが、しばしばそれは忘れられた。

2) スーパーバイザーが必要

私は、2009年から鳥取市湖山町のNPO法人とっとり人材バンク代表と職員Hさんに話をうかがっていた¹⁶⁾。人材バンクの地道な活動は、行政、大学生、農村の3者に人材バンクへの信頼を生みだし、県の事業委託先として頼りになる存在になっていった。都市-農村交流の重要性や必要性についての認知が次第に広がる一方で、もう少し深い交流の中身を検討すべき段階に来ているとの認識が生まれていく。

例えば、臨時の助っ人、単なる労働力の需要と供給は、一定程度出来てきたが、もっと踏み込んだ支援が必要なのかどうか。農山村の人々にとって、またそこへ出かけて何らかの手伝い等をする人たちにとって、どのような関わり方が良いのか。継続性、責任の重さ、単なる助っ人や労働力から集落の準構成員への期待内容、集落への移住や二地域居住をどう進めて行くか等である。

鳥取県のこうした事例は、これから行政とNPOの協働で都市と農村をつなぐ事業を始めようとしている岡山県にとっては、身近な良いモデルのはずであった。私は岡山県の担当者から聞かれる度に詳しく説明し、現場の担当者は興味を示していた。しかし、実際の制度設計には反映されなかった。その理由は不明であるが、スーパーバイザーが不在であったことは確かである。

4. ムラの主体性と展望

(1) ムラの主体性

都市-農村交流を通して、外部からムラへさまざまなものがもたらされる。本論では、「消費される農村」という時、農村側の捉え返しはどうなっているかを見てきた。例えば、閉鎖的、保守的、男尊女卑的だった農村が、都市との交流によって活性化したり、視野が広がったり、違う視点からものが見えるようになったりする。都市と比べてここには何もないと卑下していたら、何もないのがいい、癒されるとほめられる。そういう見方もあるなど自信を持つようになる。

6次産業化や農村女性起業活動を通して、それまではお金にならなかったもの、なりにくかったものが経済的価値を高める。使用価値しかなかったものが商品価値を持つ。おもてなしも家族や親せき、集落内でやっている分には何のお金も生まなかつたものが、外部の人を相手に同じことをすると、お金になったりする。家族で必死にやってきた田植えや稲刈り、田んぼの作業を都会の人に体験してもらおうと、棚田の維持、景観の維持になり、交流を通して楽しみも生まれる。

利己的でバラバラだった集落が、都市との交流によって様々な変化を経験し、集落の雰囲気が変わっていく。集落の中に、信頼できる他者が増えることでお互いに助け合う、他者のこと、誰かのために自分にできることは何かを考える人が出てきたり、増えたりしていく。そうして、ムラのまとまりのようなものが生まれている。

また、既に他者への信頼、協力的態度の蓄積があるムラには、見識のある人たちが、たいてい一定数存在していて、彼ら／彼女らは、与えられた土俵、既存の枠組みにそのまますぐには乗らず、少しズラシて見ることをする。問題点の抽出と対策を立てる場合でも同様である。それをしたたかさとするか、賢さとするかは意見が分かれるかもしれない。私はどちらでもいいと思うし、重要なことは自分たちの判断の尺度を持っているかどうかということである。

ムラの主体性とは、外部からの刺激に対して、それまでの経験や知恵の蓄積の中から、どう対応するかをその都度決めていく、その姿勢である。準拠するものが自らの側にあるかどうか、消費されてしまうだけの農村となるか否かの分かれ目といえるだろう。住民たちは、都市との交流、行政とのつきあい等を通して、成功や失敗、その両方から様々な教訓を引き出し、共有している。また、都市の住民や行政・NPO・大学の教員や学生等、外部からのまなごしを注意深く受け止める中で、状況の自己定義の重要性に気づく。さらに、自分自身や集落や地区のアイデンティティ構築やその提示の仕方にも工夫がこらされていく。深まらない交流、続かない交流では、結局何も残らないということ、相互変容の重要性に気づいていく。こうした様々な気づきがムラの主体性を確かなものにしていく。

(2) 主体性を分けてみる

では、ムラの主体性は、どのような領域で構成されているのか。それは大きく2つに分けて考えることができる。本論で扱った事例のほとんどは、今まで金銭化あるいは商品化されていなかった部分を商品化する領域における主体性の発揮であった。

しかし、そうした金銭化とは全く関わらない領域におけるムラの主体性もある。例えば、平川地区では、中世の頃から続くとされる民俗芸能の渡り拍子を生活に欠かせないものとして継承してきた。しかし、人口減でトビコ（太鼓と鉦に合わせて舞う人の名称）をはじめとする渡り拍子の担い手確保に苦労する状況となり、地元の大学生等ボランティアを呼び掛けることを皆で決めた。しかし、これは祭礼であり、イベント等ではないことを強く主張している。間に入ってボランティアを募集するNPOも、応募してきたボランティアも、そのことはしっかり受け止めていたようにうかがえた。

また、ものの考え方として、世の中に広く浸透している問題解決的な思考や志向を、やや息苦しいと感じる人たちが、違和感を表明することもムラの主体性の1つと思われる。問題解決志向がなぜ息苦しいか、答えは簡単である。生活というものは、何か問題があってそれを解決していく、というただそれだけではないからである。のんびり暮らす、楽しく暮らすということに価値を置き、人々の社会的紐帯を作る・維持する・強める中で、ムラの個性や農村・地域文化の構築もはかかっていくことをめざす。そうしたムラでのそこそこに充実した生活が自覚されていくと、人々の生活の満足度は高まっていく。

(3) 展望と残された課題

展望は上記2つのムラの主体性を発揮していくことの中にある。その際、以下の2つが重要となるだろう。1つは、農村が消費されるあらゆる状況において、何かが残るような深さと継続性を持った交流を行うように努めることである。都市農村交流は、国内における異文化交流のようなものである。相互変容を通して、お互いの良い所やおかしな所に気づき、変わりうる可能性を持つ。

もう1つは、ある強迫的な空気を疑い、そこから距離を取り、自らの目指すムラのあり方を考えることである。中

山間地域支援として国・県・市町村等の行政、企業、大学等の教育研究機関等の多くは、「農村は変わらなければならない」、「選ばれるような農村になることが必要」、「個性を持たねばならない」、「諦めてはいけない」、「展望を持つことが必要」と半ば脅迫的に迫ってきた。言い方はさまざまだが、何かしないといけない、そのまま、現状維持、静かに下りていくのはダメだという点では一致している。今、安倍政権下で唐突に拙速に進められている「地方創生」政策は、まさにその典型である。

さらに深刻なことは、行政、企業、大学等もまた、その空気の中にあるということである。現代社会を広く覆っているこの空気の源は、自己責任論を前提に競争、発展、成長を手放しで礼賛するグローバリゼーションとネオリベリズムである。この時代の空気への対応、抵抗は、ムラの主体性の見せ所であり、かつ私たち研究者も厳しく問われている。

最後に残された課題として、農村を消費する主体の多様化について述べておく。日本の大学政策が変容する中、近年、大学の地域貢献あるいは社会貢献が強調されている。地域で学ぶことの重要性は否定しないが、浅薄、かつ皮相的な現実把握では、現場との緊張感が失われ学問の消費・衰弱を招く。と同時に、調査公害に似た、現場実習公害、地域貢献公害が起きる。そうした状況に陥らないために、どんな注意が必要か、別稿にて考えたい。

注

- (1) 当日座長を務めた秋津元輝も同様のことを述べている（秋津、2005a）。立川や秋津らがふまえた新たな農村研究の動向については、大会のテーマセッション時、また立川（2005）で英国農村研究における議論が紹介されている。端的に言えば1990年代以降、生産主義（20世紀システム）からポスト生産主義への移行が進む中、農村がいかなる論理で新たな展開を見せるのかが、研究上の大きな問題関心となっていたことを指す。学説史的にはその根は古く、1970年代以降のアメリカおよび英国を中心とした農村社会学の新しい潮流に求めることができる。
- (2) 岡山県内でのフィールドワークより。
- (3) 岡山・鳥取・鳥根でのフィールドワークにおいて、しばしば耳にしたことである。
- (4) 宇治町では90年代後半から、平川地区では2000年代半ばから継続的にフィールドワークを続けてきた（鶴、2009、2010、2013、2016）。
- (5) 私は、鶴（2016）で「平川の人たちは、専門家に対する疑いのまなざしを持っている。相手の話をきちんと聞いて、その中身で決める。権威のあるなしで従うわけではない。相手が持っている力や知識等で使える所は使うが、必要ない、役に立たないと思えば断ることもする。その姿勢は、相手が誰であろうと、マスコミ、行政、大学の教員、医者、看護師、保健師、その他、一貫している。」と記した。
- (6) 岡山県内のフィールドワークにて。
- (7) たとえば、高梁市内では2つの地区（玉川地区、平川地区）が事業導入を決めた。私はその事業に同僚（当時）の黒宮亜希子（専門は、地域福祉論および震災の社会学）と二人で学識経験者として深く関わった。住民主体の委員会を立ち上げ、計画書と報告書を作成した。また、平川地区では3つの集落で特にT型集落点検を実施し、報告書も作成した。
- (8) MOさんについて詳細は、鶴（2009）、Tsuru（2011）。
- (9) 鶴（2016）で、平川の人々がドラマ仕立てで日々の生活や様々な行事等を行うことを通して、「われわれ意識」を共有し、維持・再生産していることを書いた。
- (10) 鶴（2002）。
- (11) 事業は昭和63年からスタートし、毎年10集団ずつ、新規集団の開拓を進めていた。鶴（1995）。
- (12) 鳥越どんづまりハウスについて、詳細は鶴（2015）。
- (13) 大井谷集落の棚田オーナー制度については、鶴（2010）
- (14) 黒宮と私とで関わった高梁市内2地区の事業計画と酷似した事業への協力を県の別の部署から求められたことがあった。「既にやっていますから不要です」と答えると、「それは知っていますが、でも何かしないといけないので」と説明された。私たちが協力要請を拒否したのは言うまでもないが、何かしなければならぬという強迫的な構造が中山間地域への政策的まなざしをいっそう強化していることがうかがえた、笑えない話である。
- (15) このNPOは既に活動実績のある3つの団体が合同でこの事業受託のために組織化されたもので、公募により審査を経てこのNPOが委託先に選ばれた。
- (16) 棚田オーナー制度に取り組む鳥取県岩美町「いがみ田を守る会」の調査で訪ねた。

参考文献

- 秋津元輝、2005a、「第52回村研大会記事」278-281、日本村落研究学会編『年報 村落社会研究 特集 消費される農村—ポスト生産主義下の『新たな農村問題』—』第41集、農山漁村文化協会
- 秋津元輝、2005b、「編集後記」282、日本村落研究学会編『年報 村落社会研究 特集 消費される農村—ポスト生産主義下の『新たな農村問題』—』第41集、農山漁村文化協会

「消費される農村」とムラの主体性

- 秋津元輝、2009a「集落の再生にむけて ―村落研究からの提案」日本村落研究学会監修・秋津元輝編『年報 村落社会研究 特集 集落再生 ―農山村・離島の実情と対策』第45集、農山漁村文化協会、199-235
- 秋津元輝、2009b、「消費される農村と地域づくり」、鳥越皓之・帯谷博明編『よくわかる環境社会学』ミネルヴァ書房、76-78
- 荒穂豊、2008、「日本農村におけるグリーン・ツーリズムの展開」日本村落研究学会編『年報村落社会研究 特集 グリーン・ツーリズムの新展開』第43集、7-42
- 池田和子、2012、「[食文化]の商品化の構築のために」、『観光科学研究』(5)、117-126
- 菊池俊夫、2008、「地理学におけるルーラルツーリズム研究の展開と可能性 ―フードツーリズムのフレームワークを援用するために」『地理空間』1-1、32-52
- サイード、E. W. 1986、『オリエンタリズム』板垣雄三・杉田英明監修、今沢紀子訳、1993年、平凡社
- 須藤廣、2008、「第二章 難民が観光資源となるとき 在タイミャンマー難民カヤン族の観光化」(『観光化する社会 ―観光社会学の理論と応用―])ナカニシヤ出版
- 高橋誠、1998、「空間としての「農村」から農村空間の社会的表象 ―農村性の社会的構築に関するノート(1)」名古屋大学情報文化学部『情報文化研究』7、97-117
- 高橋誠、1999、「ポスト生産主義、農村空間の商品化、農村計画 ―農村性の社会的構築に関するノート(2)」名古屋大学情報文化学部『情報文化研究』9、79-97
- 高橋誠・中川秀一、2002、「人々のもつ「農村像」の特徴」、『農村計画学会誌』Vol.21.No.2、143-152
- 高橋誠、2013、「ポスト生産主義下の農村空間 ―1990～2000年代の農村地理学」『地域政策研究年報』、148-153
- 立川雅司、2005、「ポスト生産主義への移行と『まなざし』の変容」日本村落研究学会編『年報 村落社会研究 特集 消費される農村―ポスト生産主義下の『新たな農村問題』―』第41集、農山漁村文化協会
- 田林明・淡野寧彦・横山貴史・吉田国光、2008「那須地域における農村空間の商品化による観光発展の可能性」『地理空間』1-2、83-113
- 田林明、2011、「科学研究費補助金研究成果報告書」(基盤(A) 課題番号19202027「商品化する日本の農村空間に関する人文地理学的研究」研究代表者 田林明)
- 靄理恵子、1995、「岡山県下における有機無農薬農業のとりにくみ―行政主導型事業の事例―」『順正短期大学研究紀要』第23号、319-329
- 靄理恵子、2002、「農業と行政がすすめる有機農業―岡山県賀陽町―」『食・農・からだの社会学』シリーズ環境社会学第5巻、186-191、新曜社
- 靄理恵子、2009、「農村ビジネスは集落を再生できるか ―岡山県高梁市の事例から」日本村落研究学会監修・秋津元輝編『年報 村落社会研究 特集 集落再生 ―農山村・離島の実情と対策』第45集、農山漁村文化協会
- 靄理恵子、2010、「都市―農村交流の先駆的事例としての棚田オーナー制度の現状と展望 ―鳥取県岩美町「いがみ田を守る会」の事例を中心に―」八雲環境科学振興財団編『研究レポート集 2009』第10号
- Rieko TSURU, "The Birth of a Producer in Rural Areas: Their New Role in Maintaining and Rejuvenating Small Towns and Villages in Modern Japanese Rural Society", 2011年3月 *Proceedings of ARSA The 4th Conference* Legazpi City, Philippines ARSA (Asian Rural Sociology Association) September 6th-10th, 2010
- Rieko TSURU, 2013, "An Analysis about the Subjectivity of the Active Mura: A Life Consciousness in Hirakawa-district, the town of Bichu, Takahashi-city, Okayama pref.", 吉備国際大学研究紀要編集委員会編『吉備国際大学研究紀要 人文社会科学編』
- 靄理恵子、2015、『鳥取の村に生きる ―過疎化の中の知恵と誇り』鳥取県公文書館編、鳥取県史ブックレット第17巻
- 靄理恵子、2016、「第五章 地域が作り出すドラマトウルギーと役割期待 ―岡山県高梁市備中町平川地区を事例に―」鳥越皓之・足立重和・金菱清 編著『生活環境主義のコミュニティ分析』ミネルヴァ書房、2016年3月刊予定
- 徳野貞雄、2008、「農山村振興における都市農村交流、グリーン・ツーリズムの限界と可能性 ―政策と実態の狭間で」43-93、日本村落研究学会編『年報村落社会研究 特集 グリーンツーリズムの新展開』第43集
- 牧野修也、2008、「[消費される]農村と教育 ―農村体験を支えるもの」武蔵野大学現代社会学部研究紀要編集委員会編『武蔵野大学現代社会学部紀要』第9号、173-180

* 本研究の調査費の一部は、以下の2つの研究費に拠っている。

- 2010～2012年度 科研基盤(C)22530594 「消費されない農村」モデル構築のための理論的・実証的研究」代表 吉備国際大学 つる理恵子、2010～2012年度 科研基盤(B)22310163 「環瀬戸内圏農林漁業地域における女性・若者・高齢者の生活原理に関する総合的研究」代表 岡山大学大学院社会文化科学研究科 藤井和佐(靄は研究分担者)